

# 令和4年度病害虫発生予察情報 発生予報第5号

令和4年7月28日  
発表：福島県病害虫防除所

## 1 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年より高かったが、発生程度は低かった(±)	
	褐斑病	全域	—	やや多い	新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)。	現在、本病の二次感染期であるので、感染拡大を抑制するため天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する(令和4年7月28日付け令和4年度病害虫防除情報(リンゴ褐斑病)参照)。
	黒星病	中通り 会津	—	平年並 やや多い	新梢葉での発生ほ場割合は中通り、会津とも平年並(±)であったが、会津では発生程度がやや高かった(+)。	発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。
	キンモンホソガ	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	ハダニ類	全域	—	平年並	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	園内の発生状況を確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。
モモ	灰星病	中通り	—	平年並	果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	収穫期の20日前頃から果実感染がしやすくなるため、特に不順天候時は散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。
	せん孔細菌病	中通り	—	平年並	新梢葉、果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。
	モモハモグリガ	中通り	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	発生が多いほ場では、収穫後であっても薬剤散布を実施する。
	ハダニ類	中通り	—	やや多い	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)。	園内の発生状況を確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。

ナシ	黒星病	全 域	—	やや多い	新梢葉及び果実での発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)。	発病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 薬剤散布の際は農業使用基準、特に使用期間(収穫前日数)に十分注意する(令和4年7月20日付け令和4年度病害虫防除情報(ナシ黒星病)参照)。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	園内の発生状況を確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。
果樹共通	カメムシ類	全 域	—	平年並	リンゴ、モモ、ナシでの果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。 フェロモントラップへの誘殺状況は平年並であった(±)。	園地への飛来を確認したら薬剤散布を実施する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○侵入を警戒している病害虫

モモ、スモモ、ウメ等核果類果樹	<p><b>■クビアカツヤカミキリ</b></p> <p>本害虫の幼虫は、サクラや果樹類(モモ、スモモ、ウメ等)の樹の内部を食い荒らし衰弱させ、2~3年間樹内で成長し、6月中旬~8月上旬頃に成虫となって樹木の外に出ます。成虫の体長は約3~4cmで、全体が光沢のある黒色をしており、前胸部が赤いのが特徴です。</p> <p>本県への侵入は未確認ですが、疑わしいフラス(木屑と虫糞が混じったもの)や成虫を確認した場合は、各農林事務所農業振興普及部・農業普及所、病害虫防除所又は農業総合センター果樹研究所病害虫科まで連絡ください。</p> <p>病害虫防除所HP「注意喚起 外来カミキリムシ類の情報提供にご協力願います」  <a href="http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/gairai-kamikiri.html">http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/gairai-kamikiri.html</a></p>
-----------------	--

2 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト(被覆栽培)	灰色かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	葉かび病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 施設開口部をネット被覆していない場合、発生に特に注意する。
	コナジラミ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	アザミウマ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場への侵入を防ぐため開口部を防虫ネットで被覆する。 ほ場をよく観察し、発生初期から防除を徹底する。

夏秋キュウリ（露地栽培）	べと病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	降雨が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。	まん延すると防除が困難なので、発生初期から防除を実施する。
	褐斑病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。天候予報によると、向こう1か月は気温が高く、降水量は平年並と予想されている（＋）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	アブラムシ類	全 域	—	やや多い	<b>発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。天候予報によると、向こう1か月は気温が高く、降水量は平年並と予想されている（＋）。</b>	<b>気温の上昇とともに繁殖が盛んになるため、ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。</b>
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	低密度時から防除を徹底する。抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
キク（露地栽培）	白さび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	降雨が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	—	やや多い	<b>発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。天候予報によると、向こう1か月は気温が高く、降水量は平年並と予想されている（＋）。</b>	<b>気温の上昇とともに繁殖が盛んになるため、ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。</b>
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。天候予報によると、向こう1か月は気温が高く、降水量は平年並と予想されている（＋）。	気温の上昇とともに急激に増殖することがあるので、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。 抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年並であった（±）。天候予報によると、向こう1か月は気温が高く、降水量は平年並と予想されている（＋）。	<b>気温が上昇すると急激に増殖することがあるので、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。</b>

リンドウ ※過去7 年間の平 均値と比 較	葉枯病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は例年よりやや低 かった（－）。	降雨が続くと発病しやすくなる ので、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は例年よりやや高 かった（＋）。	ほ場をよく観察し、低密度時か ら防除を実施する。
	リンドウホ ソハマキ	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年並であった （±）。	ほ場をよく観察し、低密度時か ら防除を実施する。

注) 予報の根拠の中で（＋）は多発要因、（－）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

夏秋トマ ト（被覆 栽培）	<p><b>■タバココナジラミと黄化葉巻病</b></p> <p>2006年にタバココナジラミ・バイオタイプQの発生が本県のトマトで確認されています。現在までに、中通り、会津南部、浜通りで本種の発生が確認され、また、本種が媒介するトマト黄化葉巻病ウイルス（TYLCV）も中通り北部、会津南部、浜通り南部で確認されています。</p> <p>本病はウイルス病であり、タバココナジラミの媒介により感染します。汁液伝染，種子伝染，土壌伝染はしません。また、タバココナジラミ以外のオンシツコナジラミ等による虫媒伝染はしないため、媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底することが重要です。</p> <p>本病の発生を認めた場合、侵入・脱出防止を心がけ、ほ場内での発生密度が高くないように発生初期から適切な防除を行ってください。</p> <p>また、未発生地域においても、購入苗等により持ち込むおそれがありますので注意が必要です。</p> <p>病害虫防除所HPに掲載している病害虫防除情報「注意喚起 黄化葉巻病（TYLCV）のまん延防止対策」、病害虫ライブラリー野菜花き類「コナジラミ類」もご覧ください。</p> <p>URL：<a href="https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/450800.pdf">https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/450800.pdf</a></p> <p>URL：<a href="https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/433113.pdf">https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/433113.pdf</a></p> <p><b>■トマトかいよう病</b></p> <p>ほ場での発生が確認されています。本病は種子や土壌中の残渣に生存している病原細菌が第一次伝染源となり、その後、芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します。発病が疑われる株は管理作業を後回しにし、作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害拡大を防ぐようにしてください。万が一、ほ場で発生した場合は、発病株を速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。昨年発生しているほ場では注意してください。</p>
リンドウ	<p><b>■黒斑病</b></p> <p>黒斑病の発生が確認されています。本病の病斑は、葉枯病や褐斑病、灰色かび病と似ているので注意が必要です。高温多湿条件で発生が助長され、高温日照不足の天候が続くと上位葉への進展が早くなる可能性があります。これまでの調査では、8月に被害が拡大する傾向があるので、多発前の予防散布に努めてください。</p>
野菜・花 き共通	<p><b>■タバコガ類</b></p> <p>巡回調査の夏秋トマト、キクにおいて、生長点・果実の食害が確認されています。また、中通り北部ではフェロモントラップの誘殺数が多くなっています。本種は、トマトやキクの新芽や果実の内部に潜り込んで食害し、これまでの調査では8月上中旬に被害が拡大することがあるので、寄生や被害が見られた場合は速やかに防除を行ってください。</p> <p><b>■ウイルス病（アブラムシ類、アザミウマ類媒介による）</b></p> <p>アブラムシ類が媒介するCMVの発生を確認しています。ウイルスの感染を防止するため、防虫ネットや光反射資材の設置等による飛来防止対策と発生初期からの防除を徹底してください。また、ウイルスの感染株を治療することはできないので、モザイク症状等の病徴が見られる株は、可能な限り抜き取って適切に処分してください。</p>

○侵入を警戒している病害虫

<p>かんしょ (サツマイモ)</p>	<p><b>■サツマイモ基腐病</b></p> <p>本病は糸状菌で、サツマイモ塊茎の腐敗や葉・茎が枯れる病気です。はじめに地際部の茎が黒～暗褐色に変色、腐敗し、やがて茎葉が萎凋し、枯死します。発病が藩梗(茎と塊根を繋ぐ部分)を経て塊根まで拡大すると、なり首側から塊根が腐敗します。罹病した塊根やつるで伝搬し、植物残渣が翌年の伝染源になります。</p> <p>本病は平成 30 年に沖縄県で初めて確認され、その後、急速に発生が拡大し、近隣の群馬県、茨城県、東京都、千葉県、岩手県で発生が確認されています。</p> <p>発生県からの苗購入があることから、本県にすでに侵入している可能性が高く、ほ場にまん延すると防除が困難になるため、生育不良の株を見つけた際には、各農林事務所農業振興普及部・農業普及所、病害虫防除所又は農業総合センター生産環境部作物保護科へ連絡ください。</p>
<p>夏秋トマト(被覆栽培)</p>	<p><b>■トマトキバガ</b></p> <p>本種は体長約 5～7 ミリの微少な蛾で、南米大陸が原産です。トマト等のナス科作物に大きな被害を与えており、幼虫がトマト類の茎葉や果実、ナス科作物の茎葉を加害します。</p> <p>本種は令和 3 年に熊本県で国内初確認されており、その後九州各地、和歌山県と徐々に発生が拡大しています。</p> <p>7 月現在、本県における発生は確認されていませんが、発生地域からの飛来や、苗等を介した持ち込みにより、今後県内においても発生する可能性があります。発生が疑われる場合には、各農林事務所農業振興普及部・農業普及所、病害虫防除所又は農業総合センター生産環境部作物保護科へ連絡ください。</p>
<p>夏秋キュウリ(露地栽培)</p>	<p><b>■スイカ果実汚斑細菌病(ウリ科野菜果実汚斑細菌病)</b></p> <p>本病は、スイカ果実汚斑細菌病菌(<i>Acidovorax avenae</i> subsp. <i>citrulli</i>)に汚染された種子が原因で発生する場合がありますことから、我が国に輸入される種子の輸出国の栽培地における検査や輸入時の検査により、国内への侵入防止に努めているところです。</p> <p>本病は細菌によって引き起こされるウリ科野菜の病害で、種子伝染します。感染種子による幼苗の発病、かん水や接ぎ木による育苗期の二次感染、罹病苗の定植による栽培ほ場でまん延することが知られています。感染すると幼苗から果実まで全ての段階で被害を与えます。特に、果実に感染すると、最後には腐敗果となり、ほ場全体に壊滅的な被害を与えます。</p> <p>種子消毒済みの健全種子を用い、育苗期、ほ場での栽培期においては、登録農薬(銅剤等)を散布し、本病の発生の予防と、万が一発生した際の拡大防止を行ってください。</p> <p>ほ場にまん延すると防除が困難になるため、疑わしい株を見つけた際には、各農林事務所農業振興普及部・農業普及所、病害虫防除所又は農業総合センター生産環境部作物保護科へ連絡ください。</p>

詳しい発生状況や防除対策は、  
 福島県病害虫防除所ホームページ<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>をご覧ください。  
 お問い合わせはTEL:024-958-1709、FAX:024-958-1727またはe-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jpへお願いします。